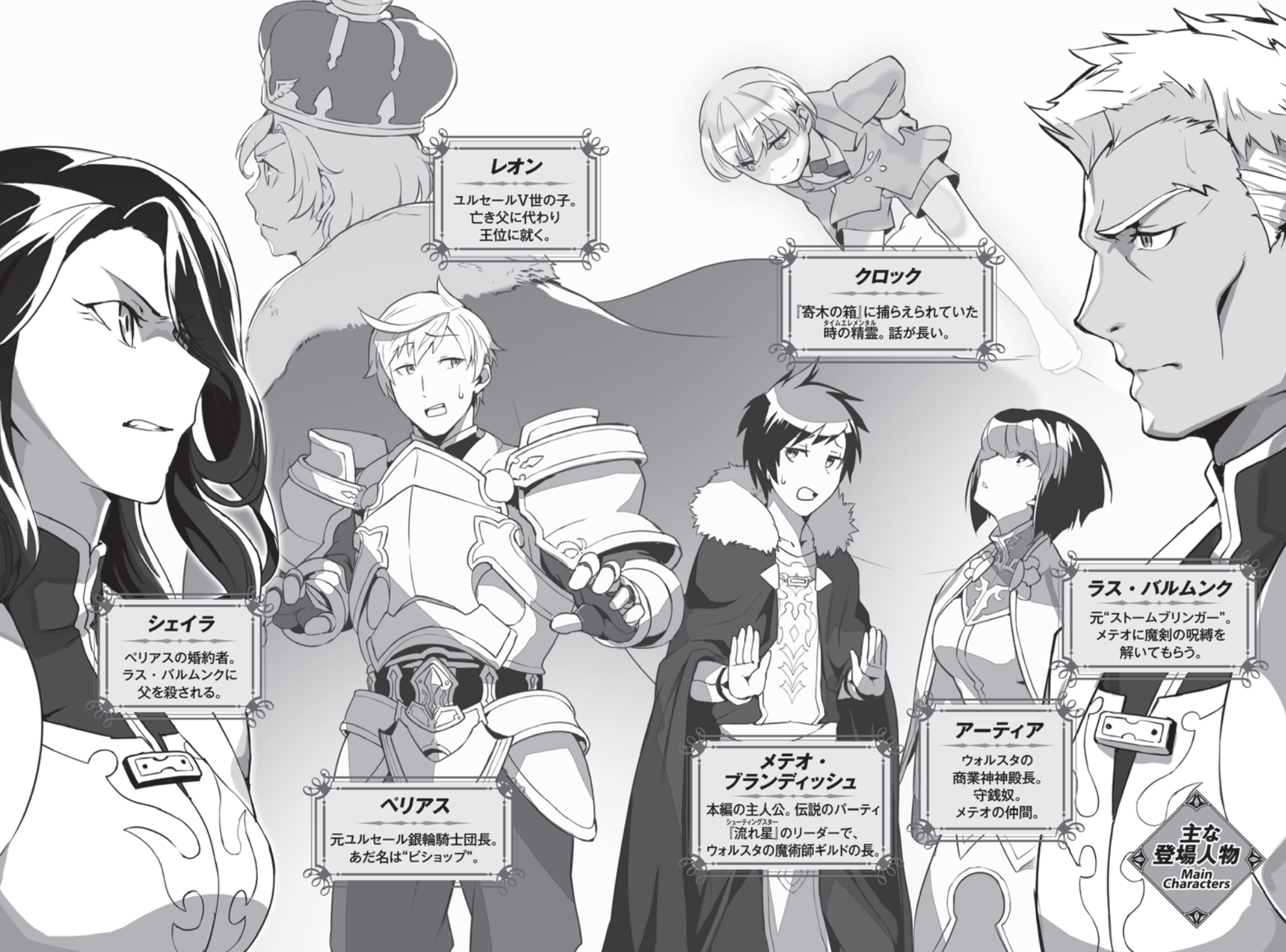


ワールドトックRPG!
4



レオン

ユルセルV世の子。
亡き父に代わり
王位に就く。

クロック

「寄木の箱」に捕らえられていた
タイムエレメンタル
時の精霊。話が長い。

シェイラ

ベリアスの婚約者。
ラス・バルムンクに
父を殺される。

ベリアス

元ユルセル銀輪騎士団長。
あだ名は“ビショップ”。

メテオ・ ブランディッシュ

本編の主人公。伝説のパーティ
シューティングスター
「流れ星」のリーダーで、
ウォルスタの魔術師ギルドの長。

アーティア

ウォルスタの
商業神殿長。
守銭奴。
メテオの仲間。

ラス・バルムンク

元“ストームプリンガー”。
メテオに魔剣の呪縛を
解いてもらう。

主な
登場人物
Main
Characters

アータレウRPG

キャラクター名

メテオ・ブランディッシュ

種族名

ヒューマン

性別

男

年齢

26 (16)

職業属性

魔法使い

LV

スキル名

17	魔術師
3	賢者
10	精霊使い
10	神官
10	盗賊
1	ゲームマスター

経験点

771,660

所持金



キャラクターの肖像・特徴

重要なアイテム等

- ・無限の革袋
- ・魔術師の杖
(魔法の発動体)
- ・リング
(魔法の発動体)

...etc

STR 36	DEX 36	AGI 34	INT 118
VIT 114			
MND 518			

1 メテオブリンガーはやめましょう

壮麗な王の間の玉座に座る少年。

年の頃は十五くらいだろう。急ごしらえという感の拭えない王の衣装を纏っているが、ずらりと居並ぶ騎士と貴族たちにも怯むことなく、一段低いところで頭を下げている俺を、じっと眺めているはずだ。俺は平伏しているので、その様子は想像だ。

ユルセールの少年王、レオン・ディストール・レイド・ユルセールVI世。先ごろ、国内を襲った数々の不幸な事件により、父である先王が倒れ、第一子である彼が国王となった。

先王は、ペストブリンガーという骸骨の姿をしたアンデッドに殺害されたということになっている。

——だが、本当は俺が殺した。

もちろん、やりたくてやったわけじゃない。言い訳するようだが、殺された王自身がそう仕向けたといつてもいいだろう。

王はそうして俺に大きな負い目を感じさせ、この国の未来を託すと、五代にわたって積み上げた

さまざまな暗部を抱えたまま逝った。

この国——ユルセル最大の魔術師にして、姿は少年、心は大人である、メテオ・ブランドイッシュ。あるいは、一介のテーブルトークRPGプレイヤーであり、好きなことは酒を飲むこと、うまいものを食べることに、電源不使用ゲーム全般、今は加えて、魔法で空を飛ぶこと、な杉村前賢、三十六歳!! 男!! 職業会社員——の俺にッ!! めちゃくちゃ重たいものを背負わせたのだ!!

そんな俺は今、大国ユルセルの城にある王の間で、王に謁見しているわけです!!

……ちよつと気が昂りすぎた。

ざっくり説明すると、俺はテーブルトークの世界で、自分の使っていたキャラクターであるメテオの姿で暮らしている。

ゲームマスターの石井先輩が事故で急逝し、形見のダイスで六ゾロを出したら、この世界に来ちゃいました。え、意味がわからない? そりやそうだ、俺が教えてほしいくらいだ。

ちなみに、先輩はこの世界で神様のなことやってみました。今はもう本物の神様になって、人間意識とかはなくなっちゃっているみたいで、話とかできないけど。石井先輩は俺より先にこの世界に来て、いろんな天地創造とかしてたようだ。ゲームマスターだから、自分の世界を作るのが楽しくてたまらないだろう。人の気も知らないで。

俺はというと、現世(?)で使っていなかったらしき経験点を、この『アータレウ』というゲー

ムに似た世界に持ち込めたので、それを使ってしまったパラメーターとレベルを上げた。おかげで、テーブルトークRPG的にはありえない、たとえノンプレイヤーキャラクターだとしても馬鹿げたレベルまで強くなっている。

ただし、テーブルトークRPGである『アータレウ』のシステムをベースにこの世界は作られているらしく、どんなに強くとも弱点はある。さらに、スキル判定の『絶対失敗』と『絶対成功』のシステムまで残っているせいで、運が悪いと大変なことになる。即死魔法とかで抵抗に失敗するとかかなりヤバイ。

しかし、俺には心強い仲間たちがいる。

メテオだけではなく、俺と同様に二十年この『アータレウ』で遊んだテーブルトーク仲間たちのキャラクターがいたのだ。俺たちが設定した町もあつたし、俺が設定したNPCもいた。

ジャマをされたこともあるのだが、そいつらに助けられて、なんとか俺はこの世界での生活基盤やまともな常識を得つつある。

現世のプレイヤーとは違うが、俺たちが二十年もの間遊び続けてきたキャラクターたち。そして、一部共有している冒険の記憶。この心強さがなければ、誰も俺を知らない世界で、俺は身に余る強大な魔法の力に呑み込まれて、邪悪な魔法使いになっていた自信がある。友人たちがいるというところが、心にきつちりしつかりとタガをはめてくれた。



それに、ここは石井先輩と俺たちが作り上げた、二十年にもわたるテーブルトークの結晶。

思いつがあるし、愛着があるし、興味がある。ならば、この世界を冒険し尽くしてやろう。

そして魔術師レベルを上げて、元の世界にまで届く魔法の品物を作るんだ。現世と『アヤタレ

ウ』を自由に行き来できるようにして、みんなにも石井先輩の作ったこの世界を冒険してもらおう。

ミーちゃん、御影、聡、総司、マリア——待っててくれ。絶対にまた一緒に冒険をするぞ!!

——という意気込みで、俺はこうしてここにとどまっている。

「面をあげよ」

玉座から声がしたので、俺は顔を上げた。

「このたびの働き、大儀であった。ウォルスタの英雄、『流れ星』のメテオ・ブランディッシュ」

レオンは、まだまだ少年といった声に、精一杯の威厳を乗せて俺に語りかけた。金髪の孺子といった感じではあるが、俺は最大限の礼儀を尽くすと決めている。こいつの父親は、俺が殺したのだから。

「父の仇と国難を退けたこと。いずれも大儀という言葉では言い尽くせぬものであった。余は先王

よりこの地位を受け継いで日も浅く、王としてはまだまだ至らぬ身ではあるが——感謝する。メテ

オ・ブランディッシュ」

王は玉座を立ち、階段を下りて俺と同じところに立つと、膝をついて同じ目線となり、俺の手を

取ってそういった。

「身に余るお言葉。非才なれど、この身がお役に立てたのであれば、これに勝る幸せはありません」
普段の俺であれば、絶対に使わない言葉だ。だが、少しでもそれっぽいことを返しておかないとな。
そのとき、俺の斜め後ろからブークスクスと押し殺した笑い声が聞こえてきた。俺の仲間たちが
列席しているところだ。……ガルダ、覚えてろよ。

実際、レオンはいい王様になるんじゃないかと思っている。

俺みたいな魔法使いに対しても同じ目線で手を取り、謝意を述べるなんて、この世界の王様としてはかなり碎けた、実直な人物に見える。先王は強大な力を持つ魔法の品物に翻弄されたが、この
ままレオンはまっすぐな王に育ってほしい。

「何か望みのものはあるだろうか。魔術を極めし者に入れられないものなどあろうはずもない
が、できる限りの礼を尽くそう」

すみません、初代のウルセル王が使ってた魔法の剣、炎の舌をもうもらっちゃってます……あれ一本で、町がひとつ買えるくらいのお値段ですよ。

ふたたび俺の斜め後ろから音がした。動いた拍子に鎧がきしんだような音だ。おそらく炎の舌の
現所持者、ハム・ボーンレスさんが『俺は返さないぞ』とアピールをしているんでしょう。わかります。

「望みなどはありません。ただ、これからウォルスタの自治をこれまで通りに続けさせてもらえ
れば、それに勝る褒美はございません」

俺たちの町、ウォルスタ。

テーブルトークRPGのセッションで、冒険で稼いだお宝を全部つぎ込んで作った、俺たちの遊
び場だ。この世界では、ウルセルという国の自治領ということになっている。ある一定の税金を
国に納めることで、好きにしていいたいというあり方だ。

「それでいいのか？ 望むのなら正式にこの国の領地に組み込んで、各種権限を与えてもよいのだぞ」
「もったいないお言葉。ですが、ウォルスタはあのままがよいのです」

またも斜め後ろから声が出た。今度は短く「よし」というものだ。くじ引きで領主にさせられた
腹が黒エルフ、リーズン・エルフィランドに間違いない。

「そうか。もつとも『流れ星』が守る町だ。なまやかな脅威では脅かされぬだろう」

レオンは、金髪からのぞく青い目を俺に向けて、力強くいった。

「だが、ウォルスタの町に何かあれば、ウルセルの国は援助を惜しまぬ。父が、先王が行った非
礼についても、二度と繰り返さぬことをここに誓おう」

ああ、うん。でもある意味、先王が俺にムチャぶりしてくれたおかげで、この国の悪習を断ち切
れたんですけどね。とはいえ、この小さな王様がそうしてくれるのは嬉しいな。俺も十分小さい

んだけど。

「そして、これは王としての頼みなのだが」

「なんでしようか」

「そなた、この王都ユルセルで、宮廷魔術師となってもらえまいか？」

そうきたか……

この国は数十年の間、魔術師を宮廷に置くことがなかった。

それは、この国の暗部である骸骨魔術師『ペストプリンガー』と、魂と引き換えに望みを叶える『漆黒の聖杯』の存在に気付かれないよう、先王が宮廷から魔術師を遠ざけたためだった。

「余は、先王の時代から常々思っていた。この国の舵取りには魔術師の力が必要だと」

「……………」

「今回のことも、魔術師を召し抱えておらぬばかりに起こったことだと思っておる。魔術の力が危険なものであるとは理解している。父はついに魔術師を信用することがなかったしな」

お父上にもいろいろあったんです……

「だが余は魔術師をそばにおいて、この国をともに導く賢者としてののだ」

「恐れ多い……」

「メテオ。お主にとっては旨味の少ない話かもしれぬ。しかし、余はそれでもお主を迎えたいのだ。

どうか、ともに国を導いてはくれぬだろうか？」

……困ったぞ。

確かにレオンは嫌いじゃない。いい王様になるだろう。でも、レオンには知らせていないが、俺はこの少年の親の仇だぞ。たとえあつちがよくなったって、俺の良心がいちいち痛むんだよ。だいたい、俺がしたいのは冒険だ。政治じゃない。

確かに負い目があり、先代にこの国と息子をよくしく頼むといわれてはいるが、さすがにそこまです自分を縛りたくはない。

「どうだ？ 宮廷魔術師の話、受けてはくれぬか」

「……き、宮廷魔術師などとは、卑賤の身に余る地位にござる」

やだ！ なんかテンパってござるとかいっちゃった!!

考えろ、なんとかうまく言い逃れろ。

「わたしは冒険者として魔術を極めましたでしたが、民を治める帝王学のことなど何も知らず、賢者と呼ばれるほどの知識もなく、とても王宮にふさわしい人材ではありません」

「そのようなものは不要。帝王学は余の領分。お主は、魔術師として宮廷の在り方を見てくれればよい」

なにこの子、ものすごく押しが強いんですけど。金髪で青い目のイケメンに口説かれているとか

レアケースだけど、あいにく俺にはそんな趣味はない。

「……わ、わたしは冒険者として、これまで多くの者とかかり合いを持ってきました。彼らは、わたしに良い感情を抱いている者ばかりではありません。わたしがこの国の要職にあると知れば、累を及ぼそうとする者も多く、その、なんというか、かの『ペストプリンガー』のような者がいつ現れるともしれません」

ナイス俺!! さすがのレオンも『ペストプリンガー』の名前にちよつと怯んだぞ。

「……確かにそれは厄介ではあるが。国を治めるということは、それらも合わせて呑み込むということ。ともに打ち勝とうではないか!! なに、魔剣は失ったものの、我が国には『ストームプリンガー』と呼ばれた剣士がおる!!」

ストブリさんてば王に気に入られているのね。さてはこの押しの強さに、あいつもほだされた口だな。

「……いえ、魔術師の敵は魔術師。国民をあたら危険な目に遭わせるわけには参りません。わたしは地方の自治領にいるくらいがちょうどよいのです」

「そこを頼む」

近い! 近いよ王様!!

「わ、わかりました!! こうしましょう!!」

襟首を掴むレオンを、俺は両手で遠ざけていった。

「ウォルスタの魔術師ギルドからふさわしい人物を派遣します。宮廷魔術師はその者にご用命を」

「メテオ。お主は……余のもとに来てはくれぬと申すのか……?」

ちよつと王様、目が潤んでるんですけど!? このまま泣かれでもしたら、ものすごく後味の悪いことにならないか。

「メテオは……余のことが……嫌いなのか?」

乙女か!!

なんですかその熱っぽいまなざしは!! 消え入りそうな囁き声は!?

側近! 王がご乱心だ!! お止めください!!

「余のことが……嫌いなのだな……」

あつ、泣く。このままだと泣いちゃう。小声だから他の人間には聞こえていないだろうけど、泣かれたら、俺どうなっちゃうの。

「じゃあ、俺は『顧問魔術師』ってことで!! 何かあったら王の相談に乗ります!! 乗りますから!!」

ガタタツ。

俺の言葉に、ストブリがコケた。

くそつ、よりによってペスブリと同じ役職名を口走ってしまった。

「顧問……魔術師か？」

「は、はい。俺がこの国のことに口出しすると問題もあるでしょうから、決定権のない立場で、あくまで王の相談役ということにしましょう。それがいい!!」

レオンの目がうつすら赤くなっている。危ない。これは手順を間違えると泣く。ていうか、こいつ十五歳だろ!? この世界じゃ成人なんだろう？　なんでこんなことで半べそになってるんだよ!!

「相談役か？」

「ええ、無礼かと思いましたが、気軽に友人みたいな感じでなんでもご相談ください」

「……友人。メテオが、余と友人になってくれるのか？」

「お、王さえよければ不肖ふしう、このメテオ。国や役目といったものを超えて、王がお困りの際には友として駆けつけましょう!!」

「友か……それもいいな!! お主はこれより余の友人であり、ユルセールの顧問魔術師だ!! よいな？」

「ぎ、御意ごい」

あれ、なんでこんなことになったんだろう……

「それではメテオよ。友としてお主に称号を送ろう。これよりお主はユルセール顧問魔術師にして、『メテオプリンガー』を名乗るがよい!!」

「すみません。『メテオプリンガー』はやめましょう」

高らかに宣言するレオンの言葉を、きっちり拒む俺。

ダメ。もう『プリンガー』って称号は悪人イメージついちゃってダメ。これだけは相手が王でも譲れない。しかも、顧問魔術師でプリンガーっていったら、完全にあの骸骨がくこつとカブってるじゃないか。「……そうか？　では『流れ星流れ星』のメテオ・ブランディッシュよ。大儀たいぎであった!!」

2 リーハン湖からの呼び声

王との謁見えつけんから遡さかのぼること数時間前。

俺たちが冒険者の宿『猫屋敷ねこやしき』でどんなちゃん騒ぎをしているとき、王宮に出向いていた魔術師ギルドの重鎮じゆうちんであるロルトじいから『精神感應テレパシー』で知らせがあった。

「リーハンの湖から、得体の知れぬ魔物が現れましたじゃ!! 発見が早かったので、ワシとバルムンク殿とで城壁で応戦しておりますが、数が多すぎますじゃ!!」

報を受けて、俺は猫屋敷にいた冒険者をまとめて《次元の扉》でリィハン湖のそばにあるユルセル城まで運んだ。といっても、俺がユルセルの城の中でゲートを開けられる場所は限られている。ストブリの部屋に現れた俺は、窓を開け放ち、そこに集まった全員に《浮遊落下》の魔法をかけて、窓の外に放り投げるといふ荒っぽい方法で、城の城壁までショートカットをした。

その魔物というのは、ぬらぬらしたナメクジみたいな肌をした人間の身体に、タコの頭を乗せたような姿をしていた。正直、見た目でちよつとビビるくらいの気持ち悪さだった。

タコの触手とヌメつとした全身で城壁にはりつき、まさしくナメクジかタコのようにぬるぬると城壁を這い上がってくる。

「メテオ殿!! どこからこんな手勢を!？」

俺たちが到着すると、杖を構えたロルトじいと、剣を振るっているストブリが見えた。ロルトじいが城壁にへばりついたタコ魔神を《雷撃》の魔法でひつpegし、それでも登ってくるのを、ストブリが剣で叩くというもぐらたたき状態である。

「たまたま猫屋敷にいた冒険者たちだ。みんな!! 城壁に登ってくるやつらを片っ端から突き落とせ!!」

「「おう!!」」

俺の号令で、数十名いた冒険者たちは城壁へ等間隔に散らばり、登ってくるタコ魔神を剣で斬り

伏せ、魔法で焼き、弓で狙い撃った。さすがにこれだけの数があると、登ってくるタコを落とすだけという簡単な対応であることもあり、皆うまくやってくれている。平均して3レベルくらいの冒険者たちだろう。十分な戦力だ。

「メテオ!! すまん、なにしろ数が多すぎて後手に回った。まさか湖からこんな数の魔物が出てくるとは思わなかった」

ストブリ——元『ストームブリンガー』は、その名の由来となった魔剣『大叢雲剣』ではなく、うつすら魔力を帯びた鉄の長剣を握っていた。

いろいろあつて、その魔剣は俺が破壊したため、持っていないのは当然だが。魔剣には呪いもかかっていたので、破壊したことは本人にも感謝されており、問題はない。

「これが『漆黒の聖杯』が破壊されたことによる反動つてやつか? これからこんなことが各地で起こるのかと思うと、ちよつとイヤだな」

月明かりで浮かび上がる、湖から次々と上がってくる人影。何体いるかはわからないが、単体ではそれほど強くなさそう。地の利が活かせるこの場であれば、対応することができるだろう。

「メテオ殿。これは一体何事なのですじゃ……!？」

ロルトじいが顔を土気色にさせて俺へと近づいてきた。魔法の使いすぎでMND——精神力が限界に近づいているのだろう。

「俺にもよくわからないが、心配するな。全滅させてやる。ロルトじいは少し休んでいろ」
「そうさせてもらいますわい。老骨にムチを打ちすぎてそろそろ限界じゃ」

ロルトじいは杖にもたれかかってその場に座り込んだ。おじいちゃんに無理させすぎたな。そのとき、前線の冒険者たちからわつと声があがった。

「何か気味の悪いものがこっちに向かつてくるぞ!!」

今のやつらも十分に気味が悪いが、もっと気味が悪いのか……

と、城壁からしゅぽつと何かが上に舞い上がった。

舞い上がったそれは、そのまま城壁のこちら側にどすんと落下する。

「……なんだこれ」

城壁のこちら側には魔法の光が一面に灯っていたので、その姿をしっかりと見ることができた。

一口では説明できない、なんともいえない醜怪な物体がそこにいた。

人間ほどの大きさの、針の先が丸いウニがあると思つて欲しい。その針の先ひとつひとつに、人間のそれよりも五倍くらい大きな手のひらが生えている。その指がわきわきと動き、全体が傾いたかと思うと――すごい勢いでこちらに向かつて転がつてきた。

「メテオ、下がれ」

片腕の戦士――ハムが、真つ赤な炎を吹き出す魔剣炎の舌を残った片腕で構えて、俺の前に立った。

「むん!!」

ハムは向かつてくる気持ちの悪い大玉に怯むことなく、重く鋭い斬撃をカウンターぎみに当てる。片腕であることを感じさせない力強い一撃だ。さすがはマスターレベルの戦士。

その斬撃は、ウニ手だらけの身体をほぼ半分にまで斬りひらいた。

だが、転がる力は弱まっているものの、まだとどめを刺せたという感じではない。

「さすがに、片腕では一撃とまではいかないな」

口惜しげに呟くハム。と、どこからともなく現れたストブリが、ウニ手だらけに剣を叩きつけて

中心部まで斬り裂く。

「とどめは持っていかれたか」

「片腕でも、その剣があればハンデという気はしないな、ハムのだんな」

「お前が斬り飛ばしたんだろうが」

ハムとストブリが軽口を飛ばし合う。こいつらタイマンのときも楽しそうだったしな。戦士同士で何か通じるところでもあったのだろうか。

「油断しちゃダメだよ。まだいっぱい来るよう!!」

城壁に立って様子を見ていたガルーダが警告を発する。

ぽつ。ぽつ。ぽつ。

先ほどと同じような勢いで、数体のウニ手だらけが空中に射出された。どうやらあの手で転がりながら移動し、壁をいつきにかけて登ってきているようだ。

「あの気持ちの悪い魔物は、猫屋敷にいた冒険者では荷が重いな」

俺のそばで状況を見守っていたリーズンは、そう呟いて指輪から炎の精霊王を呼び出した。

「またイーフリートとひと暴れできるとは嬉しい限りだ」

狙いを、一体のウニ手だらけに定める。しかし次の瞬間、そいつは空中でバラバラに四散した。うっすらと小さな人影が見える。ガルダが飛び乗って、空中で切り刻んだようだ。よくあんな得体のしれない妖怪みたいなものに乗ろうって気になるよな……

「チッ、ガルダに先を越されたか」

仕方ないという風にリーズンは燃え盛る火柱を作り出し、やはり空中のウニ手だらけをこんがり焼いた。

「熱ッつう!! リーズンってば、おいらに近いよ!! 気をつけなよう!!」

「すまない。次からはしっかり当てるようにしよう」

あんがい余裕あるな。ウニ手だらけは次々と城壁を越えて落ちてくるが、ひとまずは相手取れる勢いだ。

「エステル! メル! リコッタ! お前たちは、あのウニ手だらけが他の冒険者たちを攻撃しそ

うになったら助けてやれ。ただ、基本的に大雑把な掃討はリーズンたちに、タコ魔神は猫屋敷にいた冒険者にまかせて、お前たちは討ち漏らしたのを片づけろ」

「はい! お師匠さま!! でもあの太玉の魔神はラブーンピラー。タコの頭の魔神はヘカトパスというはずです!!」

あ、うん。モンスターの名前を同定できる賢者スキルは、エステルさんのほうが高いですしね。

俺は『アヤタレウ』にいた魔物の名前なら暗記しているけど、この世界固有の魔物の名前ってひとつも知りませんしね。

「そ、そうか。何か弱点はあるのか?」

「ラブーンピラーにはとくにありませんが、ヘカトパスは火や雷に弱いです。いずれも魔法の武器でないと効果は薄いんですが」

さすがは俺の弟子。これからもいろいろ教えてください。

「また何か飛んできたニヤ!!」

「今度はなんだ」

夜空に何かが十数体ほど旋回していた。さすがにこれ以上空から何か来るようなら、俺が魔法で殲滅するしかないか。

「お師匠様。あれは黒龍騎士団です。飛竜に騎乗するこの国の空挺部隊です!!」

エステルが空を見上げて叫ぶと、周囲の冒険者から歓声が上がった。ワイバーンに乗った騎士たちが、下の魔神たちに向けて一斉突撃を仕掛けたからだ。騎士たちは、いずれも長い斧槍を持ち、地上に急降下してタコ魔神へカトパスたちをなぎ倒すと、上昇――を繰り返す。いいなあれ、かっこいい。

「団長!! ご無事で……こ、この者たちは一体!？」

続いて城の中から現れたのは、金色の襟飾りをつけた騎士ご一行と、青い僧衣を纏った軽武装のご一行だった。団長と呼ばれたのはストブリだ。

「心配するな。こちらはウォルスタの魔術師ギルドの長、メテオ殿だ。俺とロルト殿が援軍を要請し、手勢を連れて今ここに来てもらっている」

「は、はあ」

王宮近くの湖からいきなり魔物がわき出したと思ったら、今度はならず者すれの風体をした冒険者たちがそいつらと戦っているのだから、彼らも困惑していることだろう。

「冒険者の皆!! 一時引いてくれ。これより金獅子騎士団と青衣騎士団が戦線を維持する!!」

ストブリの号令で、二十人ほどの金色の騎士たちが、城壁の冒険者たちと持ち場を交代する。致命傷を負った者こそいないが、ヘカトパスの刺のある触手で手傷を負った者や、ラブーンピラーの体当たりでダメージを食らった者はいる。いい頃合いだった。

「青衣騎士団の半数は前線につけ。半数は後ろに下がって傷ついた冒険者たちの傷を癒やせ!!」

「手慣れたもんだな、ストブリ」

「傭兵団式のやり方だな。騎士団には貴族のぼっちゃんも多いから苦労したぜ」

さすが騎士団。実力差があったり、連携が微妙だったりする冒険者たちとは違った。きれいに陣形を保ち、長柄の槍でヘカトパスの触手が届かない距離から突き刺し、次々と城壁から落としていく。

「転がる魔神、来るぞ!!」

「おう!!」

遠くから転がって城壁を駆けのぼってくる魔神に対しても、ストブリが後ろから指示を出して騎士を一旦下がらせ、魔神の落下地点に長柄の槍を固定するよう隊列を組ませる。ラブーンピラーは次々と串刺しにされていった。

「もう大丈夫なようだな」

ハムが前線を抜けてきた。しかし、炎の舌を鞘に収めてはいない。『流れ星』の面々は出番は終わりとはかりに引き上げてくる。

「イーフリートを召喚するまでもなかった」

「まだウニ手だらけに乗って遊びたかったよう」

「これからだろうな。先兵の次は親玉が来るのがセオリーってものだ」

城下から馬のいななきと、ガラガラと車輪が回る音が聞こえはじめた。これはアレだ。騎馬戦特化の銀輪騎士団ってやつが合流したな。

しばらくすると、城壁に辿りつく魔神の量が激減した。地上で騎士たちが魔神を掃討しているのだろう。

俺は安心して城壁のふちから顔を出し、いまだに魔神がわき出るリィハン湖を眺めた。

「奇襲を乗り越えれば、この国の戦力で十分相手できるな」

俺は城下の騎士たちが戦いやすいよう、いくつか《光明》の魔法を上空に固定して、戦場を照らした。これ以上からも戦況がわかりやすい。

「ワイバーンの騎士たちと戦車の騎士たちの連携が悪いな」

「確かに……みんなバラバラに動いているように見える」

眼下をのぞくなり、ハムが指摘する。

集団戦闘における陣形や戦術には詳しくないが、城壁から俯瞰するとよくわかる。それぞれの騎士団が互いに交じり合わず、ワイバーンはワイバーン同士、戦車と騎馬も同じところで動いている。ワイバーンの騎士たちは、巨体で転がってくるラブーンピラーが苦手なようだ。突進に押し負けると、ワイバーンと騎士はバランスを崩して落ちてしまうからだろう。

逆に、戦車や騎馬は小回りが利くので、ラブーンピラーの突進にもひるまない。だが、ヘクトパ

スの大群が道を塞いでいると、大きく迂回をしなくてはならない。

そんな具合にどうも噛み合わせが悪い。

「それでも優勢ではあるか。実戦経験が少ないから、あんな動きになっているんだろう」

事実、黒龍騎士団と銀輪騎士団は魔神どもを蹴散らし、リィハンの湖畔近くまで来ている。あとは、出てくる魔物たちをモグラたたきのように潰していくだけだ。

じゃあ俺たちは冒険者を連れて帰るかな……なんて思っていたのだが、突然、背中にいいようないゾツとした気配を感じた。

「メテオー!! 何かでつかいのが来そうだよ!!」

「ああ。分かっている」

ぬっと、リィハンの湖の水面が、唐突に盛り上がった。

「な、なんだあの忌まわしい姿の魔神は!」

「でかい!! 島ほどもあるぞ!」

金獅子騎士団の面々が、絶望的な金切り声を上げる。仮にも王直属の精鋭部隊である金獅子騎士団たちが情けない——とは思わなかった。俺だって少し度肝を抜かれている。

島ほどもあるというのは的を射た表現で、徐々に湖面から姿を現したそれは、まさしく異形と呼ぶにふさわしい、巨大で忌まわしい存在だった。

うねうねと触手がからみあって作られた巨体は、油膜に覆われたように刻々と気味の悪い色彩を変えつつ蠢いている。その蠕動する触手の合間に、大小様々な眼球がぎよるぎよる周囲を見回している。普通いきものというものは、目を見ればその意思が読み取れるのだが、こいつに限っては、まったく何を考えているかわからない。混沌としか、表現のしようがない。

「上陸してくるぞ!!」

「黒竜と銀輪たちは何をしている!？」

下にいる騎士団たちは、異形の魔神に攻撃するのを躊躇しているようだ。気持はよくわかる。あれには、一般人だったら見ただけで卒倒しかねない宇宙的恐怖がある……もしかしてあれって。

「……あれは上位魔神です。『星界の恐怖』と伝えられる魔神種です!!」

エステルが叫んだ。それちょっとゲームが違うんじゃないのか!? さっきから『アーターレウ』では聞いたことがない魔神ばかりだから、もしかとは思っていたんだが。

「それってやつぱりヤバいんだよね、エステル?」

「心の弱い者は、魔神の姿を見ただけで死に至るといわれています。でも、詳しいことは伝わっていません……」

そりゃあ、あれはもう外宇宙から来た神みたいなものだろうからな。出会って死んでしまったら伝承も残るまい。『漆黒の聖杯』がらみって、こういうクリーチャーが出てくるのかなあ……イヤ

だなあ……

湖からフルートのような音が聞こえてきた。病的な、狂気の音としかいいようがない、なんとも嫌な旋律が耳にこびりつく。

「……う、うわああああああ!!」

「助けてくれ! 近寄らないでくれええええ!!」

「頭の中から何か聞こえる!! この音を止めてくれ!!」
大混乱である。

下でも上でも『星界の恐怖』が目に入らない場所に逃げようと、全力で逃げる逃げる。少しは骨がありそうな隊長格たちは、ふんばって健気に戦線を保とうとしているが、こりゃあもうダメだろう。「メテオ、どうする。俺たちが前線で食い止めるか?」
片腕にもかかわらず、ハムが涼しい顔で聞いてきた。

さすがに俺たち『流れ星』は、しかめ面こそ浮かべているものの、逃げ出すものはいない。ストブリとロルトじい、そして幾人かの冒険者たちと金獅子騎士団たちを除いて、あとは全員城内に逃げ隠れてしまった。

「いや、俺が行こう——『飛翔』」

飛翔の魔法を使うと、俺はふわりとリールハン湖の上空までひとつ飛びした。

「見れば見るほど気持ちが悪いな……」

バケツに活きのいいミミズを大量に入れて、目玉をトッピングしたみたいなものだ。あまり長く見ていたものじゃない。

「早いところ『漆黒の聖杯』で溜めた膿を出し切りたいな」

俺は手持ちでもっとも強力にして広範囲の攻撃魔法、かつてこの魔法を使いたがために魔術師のキャラクターを作り、その決意を名前に込めた魔法の呪文を唱えた。

「星界の子供たちよ。この声は届いているか。この魔力は伝わっているか。これなるは我が箒。魔法を極めた者の魔法の箒。お前たちの古箒と取り替えておくれ。この地を掃くため清めるため。何も残さず綺麗にしよう。——『隕石落とし』」

3 少年王レオン（前編）

——かくして俺は、あやうく『メテオプリンガー』という称号をいただきそうになってしまったというわけだ。

あの戦いで見せた『隕石落とし』は、俺を瞬時にして有名人にしてしまった。覚悟はしていたも

の、次の日いきなり王様に呼び出されて仰々しい式典を開かれることまでは想像していなかった。おそらく一刻も早く、俺を『ユルセルの魔術師、メテオプリンガー』として認知させておきたかったのだろう。

なんかもう俺の中では『プリンガー』って悪者一択なんだから……話の流れで、顧問魔術師とかになっちゃうし。

「ひひひ。顧問魔術師だつてさ、ひひひひひ」

「ストブリ、うるさい」

ここはユルセル城の一室。金獅子騎士団の団長である、ラス・バルムンクことストブリの部屋だ。「レオン様のペースに乗せられたあげく……顧問、ま、魔術師なんて口走……ひひひひひひ。苦しい、助けてくれ」

ソファの上で腹を抱えて笑い転げるストブリ。そのまま笑い死にさせてやろうか……

俺たちは、ストブリの部屋で差し向かいで茶を飲んでいる。

ついこの間までは敵同士であったのだが、魔剣の呪縛が解け、首謀者の先王が逝った今、俺にもストブリにも争う理由がない。

だが、仲がよいのかというと別にそうではない。王との謁見が終わり『国防に関する』こと、バルムンク殿と話をしておきたい』という理由でこうしているのだが、本当は今後のことではない

と口裏を合わせておくために会っているのだ。

「ひひひひひひ……ああ、笑い死ぬかと思った」

「……なんなら、本当に死ぬまで笑い続けさせてやろうか？」

「すまない。あまりに可笑しかったもんで……」

俺がただならぬオーラを発しているのに気づいてか、ストブリは笑うのをやめた。だが、無理してこみ上げてくるものを抑えこんでいるので、頬がピクピク引きつっており、それがまたムカつく。

「まあいい。思えばこの『顧問魔術師Ⅱペストプリンガー』ってネタが通用するのは、俺とストブリだけだしな。謁見のときみたいに、人前でコケたりして不審がられなければ」

「あ、あれはすまなかった。まさかお前が苦しまぎれに顧問魔術師なんて——ばぶう!!」

ツボに入ったらしく、盛大に茶を嘔き出すストブリ。

うん、やっぱり笑い続ける呪いとかかけてやろうか。

「いいから早く教えてくれ。ストブリがレオンに説明したことを」

「あ、ああ」

あの事件後、ストブリと直接こうして話すのは初めてだった。

ストブリは、レオンに話したことを語りはじめた。ペストプリンガーが王を殺し、ストブリがペスブリを追ひ払った。その後、ウォルスタを襲ったペストプリンガーを、俺が討伐した。ざっくり

とこんなところだ。事前に決めておいたものと変わりはないようで安心した。

「レオンは納得しているのか？」

「一応はな」

「一応？」

なんだかはつきりしない表現だ。すると、ストブリは難しい表情をして続ける。

「妙にものわかりがいいというか、それほどショックを受けた様子がなかった。もしかしたら、カザン王が前々からレオン王子にこうなることを告げていたんじゃないか……くらいに冷静だった」

「そうだったのか？　俺が実際にレオンに会ったのは今日が初めてなんだけど、なんだ、その、とても冷静なタイプとは思えなかったんだが」

面相こそ金髪碧眼の美少年といった風だが、俺に対してあれこれと駄々をこねる様子は子供そのものだ。とても自分の父親を失ったと知り、冷静でいられるとは思えない。

「それなんだがな——」

ストブリが何かをいおうとしたとき、ドアがノックされ、こちらの返事を待たずに扉が開いた。

「レ、レオン王子……!？」

「バラムンクよ。余はすでに王。王子ではない」

「し、失礼しました」

突如現れた少年王レオン。ストブリは即座に臣下の礼を取る。

「あまり畏まらずともよい。余が勝手に押しかけたのだ。金獅子騎士団の団長としてではなく、余に剣術を教えてくれたバルムンクとして、相手をしてもらいたい」

「……は」

「メテオよ。先程は余のわがままを聞き届けてくれて、ありがとう」

言葉遣いこそ大仰だが、レオンは年相応な態度で俺に頭を下げた。

「あ、いえ。わたしのような魔術師に頭を下げるなどとは、その。おやめ遊ばせください」

突然のことにヘンな言葉遣いになってしまう俺。なんだ、今の会話聞かれてないよな？ 10レベルの盗賊スキルを持っている俺が、レオンの接近に気が付かないってことは、おそらく敵意や害意がないってことだ。まさかとは思うが、気配判定を失敗しているのか。いや、でも、ストブリだっているんだぞ。

「そ、それで、レオン様はなぜ、わたしの部屋にいらしたのでしょいか？」

ストブリがもつともな問いを投げかける。おそらくストブリも、俺と同じことを思っているはずだ。

「うむ、友人メテオと話でもしようと思つてな」

「それだけですか……？」

「友人と話するのがそんなに不思議か？」

レオンがいくぶん不安げな顔で、俺たちを上目遣いで見る。

「立派な王となるためには、立派な人となることを諦めねばならないこともある。美德が破滅の道を歩ませることもあり、悪徳が国の繁栄と安寧をもたらしこともある。それが王だ——」

硬い表情で咬くレオンは、まるで先王であるカザン王みたいだ。

「父上と最後に会った晩に、伝えられた言葉だ」

「いわんとすることは理解できます」

共感はできないが、理解はできる。そうしてこのユルセルは繁栄してきたんだからな。それを口にするほど俺は無礼ではない。というか、俺がそれを論すつもりはない。

「そして、父上はこう続けた。——レオンよ。王は孤独だ。ゆえに、たったひとりでもいい。友を作れ。その者の前では何一つはばからなくてもいいと感じる者。強い力を持ちながらもそれに溺れぬ者。ありのままの自分を受け入れてくれる者。そんな者を見つけたのならば、王としてではなく、友として接するがいい。そこに、お前の本当に必要な者がいるだろう——と」

レオンは、強い意志と緊張が混ざった顔で俺を見た。

「メテオ。余ははじめ、そなたをこの国の宮廷魔術師として迎え入れるつもりであった。だが、そなたは国にかかわる要職ではなく、余の友人として顧問魔術師を務めるという提案をしてくれた。余は……嬉しかったのだ」

「……レオン王」

俺には、王族や貴族の気持ちなんかわからない。だが、俺の目の前で飾り気のない言葉で語るこの少年の言葉に、俺はグッときてしまった。

苦しまぎれに出た提案だったが、この少年王のどこか大事なところに触れてしまったようだ。

「だから、ユルセルの王としてではなく、ひとりの男として改めて参ったのだ。あのときの言葉を信じぬわけではないが、おそらくは衝動的な言葉であったことくらい、余にもわかる。——メテオ、改めて余と友達になってくれ」

レオンは手を差し出してきた。

正直、俺は迷っている。

俺は、こいつの親父を殺した張本人だ。

俺がレオンの友達になれるはずがない。友達が自分の父親、しかも国王を殺害したと知ったら、それこそレオンは人間不信になってしまうだろう。

「……俺は。俺は、レオンの友達になる資格はない」

レオンは頭を下げて手を差し伸べたままだ。

だが、このまま友達となることを拒否してしまつては、レオンも納得できないだろう。せつかく心の中をさらけ出して、こんな俺と友達になってほしいと告げたんだけだ。俺もそれに応えなくては

けない気がする。

「だからレオン。俺の話を聞いてから、もう一度判断してくれ。その後にまだ俺と友達になりたいというなら……」

「おい、メテオ。まさかお前」

ストブリが慌てる。

ああそうだ。

俺はこいつの父との間にあったことを、すべて教えるつもりだ。

「一国の王が、ひとりの男として聞いてくれたんだ。騙すのは俺にとつても、レオンにとつてもいいことはない」

「……お前がそう思うのであれば、俺は止めはしない」

ストブリはごくシンプルにそう答えて、壁際にもたれかかって腕組みをした。盗み聞きされることがないよう、気を張ってくれているのだろう。

「レオン、頭を上げて聞いてくれ。長くなるから椅子に座って話そう。それと、この部屋に誰も干渉できないように魔法を施す」

ストブリが本気で警戒をして、俺も本気で警戒に当たる。ストブリの戦士レベルがいくつかは知らないが、10レベルのハムと互角なのだから、きっとマスターレベルなのだろう。そして俺は10レ

ベルの盗賊スキルを持っている。戦士系と盗賊系の気配感知があれば、悪意を持っていたり、意図的に隠れて接近してくる者の気配はまず掴める。

『冒険行為』ではない相手や自身の行為には、レベルによるスキル判定が通じないことがあるあたり、『アータレウ』というゲームは、レベルがカンストの冒険者でも『うっかり』が存在するので怖い。さつきはそれでレオンの接近に気がつかなかった。

「ここは反魔の領域。あらゆる技は表現することができない。ただ肉の力にのみ支配され、騒がしきしじまの中にある人は平穏を見つけ、ある人は絶望を知ることだろう。《反魔力領域》」

俺を中心に、反魔の領域が展開された。

これで、俺もこの空間では魔法を使うことができなくなるが、この魔法が展開されている間は、外部からであれ内部からであれいかなる魔法にも干渉かんしょうされることがない。俺個人を魔法で監視する場合に備えてならカウンターの魔法を使うのだが、レオンを監視されると面倒なので、この魔法を使う。

「それじゃあ聞いてくれ。この国に隠された歴史と、俺のしたことを——」

4 少年王レオン（後編）

俺は、知る限りのことを話した。ペストブリンガーのこと、『漆黒の聖杯』エボニークレイのこと、それらによってこの国の平和が保たれていたこと。

——そして、俺が王を殺したことを。

「先王……父は自らの死を予感していたと、余は思っていた。それは間違いなかったようだな」

レオンは驚くほど静かに俺の言葉に耳を傾けていた。俺が話を終えると、ゆっくりと口を開いた。「父上がメテオに語ったことに偽りはないだろう。いずれにしても、父上は死をもって過去から続く過あやまちに決着をつけられたのだ。余がメテオを恨む筋などひとかけらもない」

言葉の上ではそういつているが、レオンの表情は沈痛そのものだ。

「むしろ、余はメテオに感謝している。父とこの国の暴走を止めてくれ、余に隠すことなく真実を教えてくれた」

「でも俺は……」

「よい。むしろ余が心を痛めているのは、先の不気味な魔神の襲来も『漆黒の聖杯』エボニークレイを使ったがための逆風であるということだ。国を預かる者としては頭の痛いことばかりだ」

父の死の理由を知ってなお、レオンは国のことを考えている。まだ十五歳だというのに恐れ入る。しかしそれは、俺を氣遣つてのことなのだろうか。あるいは、俺への憎しみを隠すための冷徹さな

のではなからうか。

「……メテオ。もしやお主、余が私怨を隠すためや、氣遣いで国について語っていると思っているのではあるまいな？」

「あ、いや。……どうしてわかったんだ？」

「魔法に頼らずともそれくらいわかる。メテオよ、お主は顔に出やすいタイプなのだな」

俺の実年齢よりもぜんぜん若い子供に表情を読まれるのか、俺。

それにしても、本当に俺のことを恨んでいないって。

「正直に言えば、余が恨んでいるのは父上に対してだ。なぜ、話していただけなかったか。どうして世継たる余にこれほど重大なことを話してくれなんだ、とな」

「それはもちろん、息子に重たい荷物を抱えさせたくなかったんじゃない——」

「なればこそ!! なればこそ、余は正直に打ち明けてほしかった。確かに、年若い余にできることがあるうはずもない。だが、父の死を看取ることくらいはできたであろうに。王と王子であればなおさら——。息子はそれほど頼りないと思われたか。余は、侮られたことと、慮られなければならなかったことが、悔しいのだ」

……すげえな、レオン。考え方が十五歳とは思えない。個人としても、王としても、しっかりと自分の考えを持っている。のほほんとサラリーマンしていた俺なんかとは、とうていモノが違う。

「ゆえに、余はメテオに感謝しているのだ。王であつた父が国の未来を託したお主が、こうして余に真実を伝えてくれたことが嬉しい。父上が伝えてくれなんだ真実を、父上に代わって伝えてくれたことが嬉しいのだ」

嘘だ。父親を殺した人間に感謝しているだなんて。

「確かに、父上が死んだことは悲しい。しかし、父上はメテオに決着をつけてもらって救われた。

余はそう感じたのだ」

レオンはまっすぐに俺を見ている。

いい大人の俺のほうが、この世界においても大魔術師とされている俺のほうが、目を逸らしている始末だ。

まぶしすぎて人の目を見ることができない、なんてことあるんだな……

「父上はよい国王であつたと思うが、代々続いてきたユルセルの因習に呑み込まれた。しかも、誰にもそのことを相談できず、自分ですべてを抱え込んでしまった。その姿は、王として尊いものではあるが、信じるに足るものを作ることができなかったという意味では、不覚でもあろう」

力強い言葉と視線。うつむいて、目を逸らしていてもわかる。レオンは王の資質を持っている。

もしかすると、一般スキルで『王』のスキルを持っているのかもしれない。だが、この言葉の力強さは、レベルやパラメーターからくる強さでもない。

決して数値化できない、人間としての強さや弱さ。悩みや葛藤^{かつどう}を乗り越えた者にのみ与えられる力だ。レオンはこの若さでそうしたものを身につけている。

「最後に父上と余とで交わした言葉——友を作れというのは、大いなる自戒^{じかい}であったのだろう。誰かに頼らなくては解決できなかった無念と、信頼できる者に相談さえできていれば、違う道があったかもしれないという悔恨^{かいこん}。すべてをメテオが話してくれた今、ようやく父上の本意をつかむことができた気がする」

「レオンはすごいな……俺なんかよりもよっぽどすごい」

素直に感じたことを口にした。

「俺はもつとこう、シンプルな性格で、楽しければいい、面白ければいい、そういうタイプの人間だからさ。ちゃんとレオンのいつていることを理解できているかわからない」

「そうか」

「でも、思ったことを正直に話しているのはわかる。魔法を使わなくてもだ。すごいよ、レオン。思ったことを素直に正直にしゃべるのは難しいし、素直すぎるとうっかり汚い言葉も出てくるものだ。でも、素直な気持ちで出てきた言葉が美しすぎる。もし、俺が同じ立場だったら、恨み事のひとつやふたつは絶対に出てくる」

「うむ」

「うまいこといえないし、正直レオンに引け目も感じている。でも、だから俺は自分からいいたいんだ。いわれっぱなしだから、俺からレオンにいわなきゃいけないと思う」

「何を、なのだ？」

「俺と、友達になってくれ」

俺はレオンに手を差し出した。もううつむいていないし、レオンの視線も受け止めている。

「父を殺した魔術師でよければ、俺と友達に」

「余は、はじめからそのつもりだ、メテオ」

レオンは、俺の手をがっちり握り返した。

「一国の王を友人に持つのは気苦労が多いかもしれないが、余もお主を大魔術師とは思わずに接する。ふたりのときは、名を呼び合う仲でいてほしい」

「もちろんだ、レオン」

「……あー。話の最中ですまないんだが」

ストブリがいくぶん困惑気味にいった。

「いまさらなんだが、俺がこの場にいてよかったのか……？」

「バラムンクは、余にとって剣の師匠。メテオも愛称で呼んでいるのだから問題はあるまい」

「愛称……ああ、ストブリのことか」

ストブリが友人というと、ちょっと違う気もするが、こいつのことは嫌いじゃないし、信用はできる。どちらかっていうと、他のパーティの冒険者仲間みたいなもんだな。

「忠節は感じるものの、もとよりバルムンクは余に対して、それほど礼儀正しいわけではない。余はそういうところが気にいっていたので、父上に頼んで剣の師となってもらっていた。友とはまた違う意味で信頼しているぞ、バルムンク」

「レオン様がいっていうなら、それでもいいんですけどね。俺はどうも宮廷の言葉遣いってのが苦手なもんで」

どうしたもんか、という風でストブリは頭を掻いていった。

「俺がいうのもなんですが、レオン様。世の中こいつみたいなお人好しばかりじゃないですから、あんまりその、自分に正直になりすぎるのも考えものです。かくいう俺からして、自分の生命と趣味が最優先なんですから」

「余も誰かれ構わず軽々しく心を開くつもりはない」

レオンは胸を張って答える。

「しかしながら、王が王として最終的な信頼を勝ち得るには、心を開いて器量を推し量ってもらうしかあるまい。余は、余が必要とする時と場所においてのみ、心を開こうぞ」

堂々としすぎている。これが王族ってものか……

「さて、メテオ。お主にぜひとも頼みたいことがあるのだ」

「何すか？」

先ほどとはうって変わって、もじもじはじめたレオン。

何、何なの？ このギャップは!?

「……余は一度でいいからしてみたいことがあるのだ」

やだなんか怖い。何？ 何をいわれちゃうの、俺。

「俺にできることなら……無理のない範囲で危なくなくて、かつ外聞が守られるのであれば、たいていのことはしてあげられますけど」

「なんだメテオ。その予防線じみたものの言いようは!？」

「いや、レオンがただの子供じゃないって知っちゃってますし」

「子供とは失礼な。余は成人しておるわ。似たような体格のお主がそのような言いようはあまりにひどい」

「すみません!! わかりましたから!! 近い近い! 顔近から!!!」

レオンは目を潤ませて俺ににじり寄ってきた。さっきまでの威厳はどこにいった!? というか、このリアクションは子供だろ!!

「……余は、空を翔んでみたいのだ」

「空ですか」

「ああ、空だ。あの天空を鷹のように自由に翔ぶことができれば、どんなに気持ちのよいものだろうか。いつも考えていた」

その考えはよくわかる。俺もこの世界に来て真っ先にやったことは空を翔ぶことだったからな。生身で空を翔ぶっていうのは、本当に爽快なもんだ。王宮ですつと暮らしてきたレオンのことだ。よっぽど空に憧れでも持っているんだらう。

「空を翔ぶのは気持ちいいぞー。俺も気が滅入ると魔法で空を翔びまくっているし」

「やはり魔術師は空を翔べるのだな!? 羨ましいぞ、メテオ!!」

「あー。でも、自由自在に翔ぶっていうのは案外難しいか……」

ふと魔術師の魔法一覧を頭の中で検索して、レオンの願いを叶えるのが難しいことに気がついた。《飛翔》は術者にしかかけることができない魔法だ。

「できないの……か? メテオ、お主は大魔術師なのだろう? できるのであろう?」

「レオン近い近い!!」

レオンがぬるりと俺の首に手を回して、目を潤ませる。

何なのレオン。もしかして男好きなのか!?

「《念動力》でレオンを持ち上げて、俺が動かせばできないことはないけど……」

「だめだ。余は自分自身の意思でこの空を翔びたいのだ」

「ちよつと首から腕を……苦しい、レオン!!」

自分で翔びたいとなるとあれしかない。いいのかなあ、仮にも王様相手に。

「できないことはないです。《変身》をかけて鳥になればいいんです」

「鳥! それはいいな!!」

「でも《変身》っていうのは、呪いみたいなものなんです。もちろん痛みや副作用なんかはありませんが、魔術師が王に呪いをかけたとバレたら、俺のイメージ悪すぎやしませんか!?

「バレなければよいのだ」

「そりゃまあそうだけど……」

俺はストブリを見る。すると、ストブリは諦めたような顔をしている。

「メテオ。その“おねだりモード”に入ったレオン様は無敵だ。諦めて魔法をかけてやってくれ」
何その“おねだりモード”って。

「メテオ、メテオ。早く余を鳥にするのだ。余も、ここに長くいられるほど暇ではないのだ」

「絶対に秘密にしてくださいよ……」

「約束しよう。早く早く」

なんか厄介事の種にしかない気もするが、レオンが秘密を破ることは考えられない。うっか

り口にするようなタイプにも見えないし、まあいいか。

俺は《反魔力領域》^{アンチマジック}を解除して、魔法の発動体になっている指輪をはめた手を振った。

「根を辿り、遡り、望むがままの生を謳歌しよう。陸を歩き、空を飛び、海を泳ぐ。肉体よ、もつと自由であれ。《変身》^{ポリモルフ}」

呪文とともに、俺の魔力がレオンをまばゆく包む。その光は徐々に凝縮していき、ついにはスイカほどの光の玉となって空中に浮かんた。

「はじめのうちはバランスが取りにくいですが、気をつけて」

そこには一羽のハヤブサがいた。そうとうに速い飛翔スピードを誇る猛禽で、かつて俺がアヴィルドに向かうために使った姿だ。

頼りなさげにばさばさと羽ばたいて、なんとかレオンハヤブサはテーブルの上を滑空した。俺も経験あるが、変身してしばらくは身体感覚が違うから、ともに動けない。変身後のバランスは、テーブルトークRPGだとルール化されていないところだが、そりゃ人間が鳥になつてすぐに翔べる方がおかしいよなあ。

「キュイイイ!!」

「鳥語はわかんないですけど、しばらくこの部屋で飛行練習してから湖の上でも翔びましょう」

「キュキツ!!」

どうやら伝わったようだ。レオンは、部屋の端から端までを使って羽ばたきと滑空の練習を始めた。筋がいいのか俺の魔法の性能がいいのか、二〜三度部屋を往復するだけでサマになってきた。

「キュイイイイイッ!!!」

レオンはひときわ大きく鳴いて、大きく開いたペランダの窓から飛び出していった。

「ちよつとレオンの護衛に行ってくる。ここは頼んだぞ、ストブリ」

「ああ。俺の部屋だから誰かが勝手に入ってくることもない。レオン様のストレス解消に付き合つてやってくれ」

「じゃあ行ってくる……《飛翔》^{フライト}!!」

ハヤブサになったレオンはノリノリだった。

ブーメラン型の翼を広げ、リィハン湖の上をぎゅんぎゅんと飛び回っている。

「いいなあ、あれ。前は、翔ぶのを楽しむような状況じゃなかったからなあ」

思うさま羽ばたくハヤブサレオンを見ると、俺も自分に《変身》^{ポリモルフ}をかけて、一緒に翔び回りたいくなる。だが今それをやってしまうと、いざというときすぐに魔法が使えない。鳥の姿では、呪文を唱えられないからだ。

「生身のまま《飛翔》^{フライト}で翔ぶのも気持ちいいんだけど、《変身》^{ポリモルフ}で鳥に化けて翔ぶのも乙なものな

んだよな」

まあいい。今日はレオンのターンだ。思うさま翔び回るといい!!

というわけで、十分ほど自由に翔ばせてみたものの、レオンが飽きる様子は一向にない。もしかして《変身》で頭の中までハヤブサになったんじゃないだろうな。

俺は思わずぐくりと唾を呑みくです。

まだまだ『アヤタレウ』のゲームとこの世界とではどんな違いがあるのか確かめきれしていない。チートな俺が平気だったからといって、一般人が大丈夫な保証はないのだ。

「確かめておくか……。言葉に秘められた意味を探らず、うわべの音を求める者に、いざや響けまことの鐘。波紋となりて広がり、そして返り給え。これよりは目でもなければ耳でもなく、魔力で通じ合え。《意思疎通》」

8レベルの魔術師が使える呪文。《意思疎通》は、自分を中心に半径十メートルの生物と意思疎通ができる魔法だ。

声を出さずとも意思疎通ができるため、集団で隠密行動をするときなんかはわりと便利で、町中の冒険、いわゆる「シティ・アドベンチャー」ではよく使った魔法だ。

ただ、この魔法には大きな制約がある。

単純なことしか意思疎通ができないのだ。「あっちに行く」「ここを登る」「帰る」「腹が減った」

など、簡単な内容でしか通じ合えない。隠密行動のときなどは、事前にはっきり目標を定めておかないと、逆に混乱することもある。

そしてもうひとつ、副次効果的な使い方ががある。『動植物とも意思疎通できる』のだ。

こう書くと、すごい!! と思うかもしれないが、実際は地味なものだ。ほとんどの場合、植物たちは「もっと水が欲しい」とか「地下のもぐらがうざい」といった感覚しかよこさない。

動物はそれよりもマシだが、せいぜい情報として聞き出せるのは「近くに水場がある」とか「最近大きな怪物が俺たちを食べに来る」といったものだ。

「この魔法を使うと、石井センパイはノリノリだったけどな」

俺がこの魔法を使ったとき、石井先輩は楽しみに植物や動物のマスタリングをするのだった。いかに曖昧でいい加減な情報を与え、しかしそこに一片の真実を紛れ込ませる。そんなマスタリングができるので、先輩的にはこの魔法が好きだった気がする。

ぎゅいぎゅいと翔び回るハヤブサに向けて、意識を投げかける。

(もう帰ろう)

すると、ハヤブサはすぐに意識を返してきた。

(もう帰る)

よかった。どうやら意思は伝わったようだ。

ハヤブサレオンは、最後にひょいっととんぼ返りをして、そのまま王城のストブリの部屋に向かつて滑空かっくうを始めた。俺も後を追うのだった。

5 バルムンクの苦悩

「すごかった！ ハヤブサになって翔とぶというのは、あんなにも気持ちがいなものか……!!」

ストブリの部屋に戻って魔法を解き、開口一番レオンが叫さけんだ。

俺は、レオンがこのままハヤブサ化するんじゃないかと思ったから安心したよ。

「ありがとう、メテオ。余の願いを叶かなえてくれて」

「これぐらいだったらお安い御用です」

「そうか。これから気苦労が増える余にとつて、数少ない楽しみが増えたというものだ」

ハヤブサから人間に戻った違和感が残っているのだろう。レオンは大きく伸びをしてから答えた。

「気苦労ですか」

「どこで『漆黒エボニーの聖杯グレイル』の影響が噴出するかわからぬし、壮健であつた先王が急死したのだ。他国が黙もくっているとも思えぬ」

いわれてみればその通りだ。俺はごく自然に感心してしまった。

「なるほどね。今までは、ペスブリの——アーティファクトを使った大量殺戮さつりくからの『漆黒エボニーの聖杯グレイル』つてコンボがあつたからな。大抵の外敵なんか目じゃなかっただろうしな」

「ウルセールをぐるりと囲む海には神風かみかぜが吹くとされ、外国の戦艦などが来ようものなら嵐が起こつて難破するか、不思議な力で船が消えてしまふといわれている。今思えば、父上と先代の顧問魔術師が動いていたのだろうな」

「その、先代つていうのやめて……」

たとえ本当のことでも、さすがにあの骸骨がいこつと同じ役職であることを思い出させられてはたまらない。あいつのせいで、石井先輩からもらった一回こっきりの《願ウィッシュう》を使うハメになったのも、根に持っている。

「む。確かにシャリエという者については、他の者に知られてはならぬな」

「それもあるけど、俺の気持ちの問題です」

「そうか、とレオンは返事をして扉に向かった。

「それでは余は国務に戻るとしよう。各地に騎士団を派遣して、警戒に当たらせねばならぬからな」

「俺も後で合流させてもらいます」

レオンの言葉にストブリが続ける。こいつも王の近衛このえとはいえ、一軍の団長だからな。